



今月の編集は〈東京事務局〉 119号 400円

わたたちの'87地方選レポート

新しい選挙の創造	-----	3
全力疾走「奇蹟まで」	-----	4
女のネットワークがトッパ当選に	-----	14
9942人のみなさんありがとうございます	-----	18
指の折れることと握手してくれて	-----	21
これからはいまる	-----	23
組織選挙のなかでわたちがやれたこと	-----	28
もえる女の会は労組との接点を	-----	31
魔物のような選挙で	-----	33

シリーズ「わたしの仕事」No.5

パート現場報告 ----- 35



潮騒

〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会場・連絡先
5月30日(土) 7月17日				岩波ホール 0342621525
6月3・10・17日				女のためのフリニック準備会
8日(月) 13:00				名古屋地裁二〇二法廷
9日(火) 10:30				毎日新聞二階ロビー 集会
13日(土) 14:00				福岡市立婦人会館 0927122662
13日(土) 14:00				銀座ヤマハ・ホール 03313139
17日(水) 18:30				渋谷勤労福祉会館 03407070
21日(日) 12:30				沖縄米軍カテナ基地
20日(土) 13:00				ひょうご英南会館 0782213600
20日(土) 18:30				箱根シャレード・ベルソ
20日(土) 18:00				主婦会館
6月5日(金) 18:00				千代田区公会堂
6日(土) 12:30				豊島区立勤労福祉会館
				会費 2,500円
				パネラー 上野千鶴子
				田中美津
				近藤和子
				久田恵

新しい選挙の創造

女たちの熱い選挙戦が終つた。

当選を果たした人たち、惜しくも落ちた人たち、いずれにしても女たちが世の中に投げかけたものは大きかった。

白い手袋をしなかった人たち、「お願いします」を連呼しなかった人たち、カンパだけで聞った人たち。女たちは各地でお金をかけた男たちの選挙とはまったく違うやり方を選びとり、さまざまなお金で自分たちの新しく、楽しい選挙を創りあげた。お金をかけなくたってこれだけやれるじゃないか、やれる力があるじゃないか、といういろいろなことを証明した選挙だった。

女たちの選挙の総括はいずれも本音で語られていたすがすがしい。

失敗したことは失敗とみとめ、できなかったことはできなかったとみとめるいさぎよさは男にちのいさぎよさと少し違っているのではなからうか。

「女たちは本当にすばらしい力を持っている」

「これからが正念場だ。女たちが政治を変えていくのはまさにこれからだし、当選した人も落選した人も同じように口にする。」

女の議員の割合は、今一回増えてやつと二%という。

ノルウェーの四五%は夢のように遠い。

しかし女たちは立ち止まらない。女たちは動き続ける。

この次は二%を三%にしよう。

山は少しづつ動き、だれもが山が大きく動いたことを知る日が来るだろう。

山口のり子

全力疾走 「奇蹟」まで

東京都議
三井マリ子さん

たとえば恐竜を育てるみたいに

私にとっての選挙―それは例えば、息子がお気に入り絵本「やさしいきょうりゅうの飼い方」の世界みたいだった。きょうりゅうセンキョザウルスは、いたいけな赤ちゃんの状態で私たちの前に連れられて来た。育てた経験者からは、こんなに小さなうちからひきとっても丈夫に成長するはずがないと敬遠された。そこで初心者ばかりが、シロウト特有の楽観主義で飼育当番にあたることになった。日本中から、いや外国からも、地球人の女たちがなんとしてもこのきょうりゅうの子を一人前に育てあげようと集まってきた。センキョザウルスの心臓は候補者でできている。とびきり元氣よく脈打ち、一か月の間に見ちがえるばかりの成長だった。

多くの人たちと一喜一憂しながら、食欲絶大なこのいきも

のを飼ってみると、思いがけず親愛の情は深まっていた。今でも、私は自分ののめり込みに、時には葛藤を感じながら、きょうりゅうの世話をしていた数週間のあれやこれやの出来事が、頭の引き出しに容易にしまいきれずに散らばったままである。まとまりのない報告になるだろうこと、そしてあくまでも私の目を通しての経験であるにとどまることをおことわりした上で、三井マリ子となかまたちの短期集中型選挙を紹介したい。

シロウト選挙を女の手で

三井マリ子さんは知る人ぞ知る、女性解放運動で活躍してきた高校の教師だった。そのマリ子さんが立候補を決意したのは、今年の二月、社会党から強い要請を受けてのことだという。三月四日まで教員の職を続けていたので、四月十二日の投票日まで、選挙期間はわずか三十日余りしかなかった。そもそも都知事選挙への関心はあっても、同時期に杉並などの五つの区で都議の補欠選挙をやるなんてことは報じられることもなく、ほとんどの人に知られていなかった。二月の終わりに、私も中嶋里美さんから「マリ子さんが杉並で立つことを決めたので、住んでいるあなたもぜひ応援してね」と電話でいわれ、とてもびっくりした。「行動する女たちの会」をとおして知っているマリ子さんが政治の世界に入ることとは意外ではなかったが、あまりに急なことだったから。も

うすでに街中に区議や都議候補者のポスターはあふれており、選挙戦のスタートがとつくにきられているのは誰の目にも明らかだったのだ。

杉並区選出の社会党都議が昨年（八六年）十二月に亡くなったためにできた欠員一のポストを競う選挙であること、当選ラインに到達するには、有権者四十万人のうちの八万という大量の票が必要であること、などという（おそろべき事実を知ったのは三月八日に開いた「政治を変える女の会」発足の集まりのことだった。この会はマリ子さんを応援し、女の政治参加をすすめることを目的として活動してゆこうという団体だった。様々な分野で女性の問題に取り組んでいる女たちが中心となって、七十人余りが集まったこの時が、私たちの選挙運動のスタートだった。社会党というクロウト集団と並んで、私たちはシロウト集団として自分たちのやりたいように女の選挙活動をやってみようという意気込みを持っていた。

集会前に、マリ子さんは上下真紅なジョギングウェアで、初体験の第一声を荻窪駅前行なった。一緒に集会のチラシを配ったなかまたは真紅なバラを胸にさした。この後の選挙期間中私たちは「紅」をマリ子の情熱のシンボルカラーとし意識的に身につけて印象づけようとした。

集会ではマリ子さんをぜひにと推した社会党の女性国会議員二人、都議の池田あつ子さん、杉並区在住の向井承子さん、

樋口恵子さん、そして住民運動にかかわっている頼もしい女たちなどからの励ましや忠告が続いた。会は自主的な人びとの集まりだから、個々の思いを共有しあえる場があつて初めて動ける。この集まりは、マリ子さんの選挙に何かしたいと思っていた人をつなげ、「さあ一緒にやっこう」という合意を生んだ。

集会のあと、阿佐ヶ谷に借りた新しい（政治を変える女の会）事務所（ニDKのマンション）へ移動して、担当者（ニユース、映画会、会計、事務局）が決まり、スケジュールを検討した。一週間後には事務所開きパーティをすることが決まり、その準備と協力要請ハガキの発送、催しの企画など仕事は山とつまれていった。

「女たちのマリ子、男たちもマリ子」のフレーズを掲げた明るくて目立つポスター、脱マドンナ・マークの入ったリーフレット「女の元気をのせて」の二点は、この日までに友人たちのアイデアを集めてできあがつてきた。事務所に積まれたこの品は、私たちに選挙というものをもう後もどりのきかない選択だと実感させた。なんとかこれらを一刻も早く、多くの人の手や目にふれるべく、届けなければならぬと。

翌週（三月十五日）のパーティまでに、杉並の各地にポスターやリーフレットを置いてくれる所ができた。「マリ子ニユース」創刊号、連続講座のポスターとチラシ、徹夜でしあげてくれたピンクのマリ子旗が数本できあがつた。またカン

パの振り込み口座を開き、カンパ要請を発送した。

事務所開きの日、パーティを部屋の中だけでやっていたのでは、伝わらないと、場所を阿佐ヶ谷駅前の広場に移動した。草花の鉢を並べて舞台にみたて、友人たちが次々にマイクを握った。黒テントの役者による憲法を題材にした寸劇、フォークソング、マリ子さんを囲んで「パワフル・ウィメンズ・ブルース」を合唱した。にぎやかな駅前パフォーマンスに、道行く人は好奇の目を向け、他陣営は「社会党」の変貌ぶりに目を疑ったという。

この時期、私たちの会は楽しく目立つ方法でアピールして、会の名称もマリ子さんの名前も社会党とは思われないような路線で売り込みたいと思っていた。だからどうしても、私たちの応援団のカラーである、「女、オンナ、おんな!」を協調することになった。負けてもともとだから、せめてやるなら面白く、悔いなく自分たちの主張を打ち出していきたいという考えが強かった。しかし、やってみるとこういうスタイルだけではとても支持は広がらないだろうことを感じさせられた。具体的な政策や、マリ子さんの人柄をしっかりと伝え、信頼を得られるような方法へとつなげることが次への課題だと思われた。

人に来てもらうのはラクじゃない

次の一週間は、発送作業や集まってくる名簿整理に追われ続けた。この時はまだ、働いている女が主体だったので、日

中、事務所につめている少数の人たちの手に仕事が集中し、その人たちの疲労が目立っていった。定時制の教師や残業に追われるプログラマーは、夜中しか自由な時間がないと、ペアを組んで、車でポスターはりをつけもってくれた。ひとりひとりが、できる限りの力を寄せあつて、支えた時期だった。マリ子さんは連日、早朝と夕方には駅前での演説、日中は社会党の組んだスケジュールで労働組合や支援者へのあいさつまわりが続いていた。一方、地域運動に長年たずさわっている熟年パワーの数名の方々が連日ご自分たちの広いネットワークを丹念にまわってくれていた。このことは私たちが中高年齢層の人たちの支持をつかみきれない中、どれほど力強い支えになったか、はかり知れない。《女の会》では、友人どうしを呼び集めた《マリ子さんを囲む会》を開いたり、保育体制をとつての教育と老後をテーマにした屋の講座、「ナウ・ウーマン」の上映会をやった。また区内や東京で当面している課題を洗い出し、意見をまとめて政策づくりをすすめ、ピラ配りや、公選ハガキの宛名書きの依頼をやった。企画の内容も対象をひろげて、呼びかけのチラシはできる限りまいした(連続講座のポスター五百枚、チラシは八千枚)にもかかわらず、催しには思ったほど、人が集まってくれなかった(十〜三十人前後)。

私たちのやり方はこれでいいのだろうか、果たして「三井マリ子」を知ってもらえているのだろうか、このままの運動

をやっている、共感や投票にとっても結びつかないのはいかた不安になった。いい企画をしたつもりなのに、せっかく保育をやってくれる人に来てもらったのに、口惜しくも感じられた。人にわざわざ出むいてもらうということは、そんなに容易なことじゃないと痛感した。

この時期、マリ子さんの魅力を出せた企画に、公園から公園へとジョギングしながらのピラマキがある。日曜日の午前、

赤いジョギングウェアを身につけて、なかまと一緒にマリ子さんはピラを片手に走った。足早に通りすぎる通勤客に向ってする早朝の駅でのピラ配りとちがって、のんびり散歩する人やベンチで休むひとたちからの反応は好意的だった。時には足を止めて話し込んだり、お花見の宴席に呼ばれてごちそうになったりもした。そうだ、人を集めることはかりでなく、もっと人の中へ飛び込んでゆくというテだっているのだ。



「女たちのマリ子、男たちもマリ子」と例のようにマイクを握ると、体育の授業をしている白いシャツの小学生が、ワーツという教声をあげて、あっという間にフェンスの方に駆け寄ってくる。思わず「子どもたちのマリ子よ」とこたえる。
(東京新聞 4月22日)

それゆけ告示だ！ 飛び出そう

日中の事務局体制は、教員のメンバーが、春休みを投入して入ってくれたり、知人から知人への支持が広がって、主婦や産休中の女たちがひんぱんに顔を出してくれるようになった。活気と熱気が満ちだしたところで、四月三日の告示日を迎えた。〈女の会〉の事務所の近くに、社会党の選挙事務所（選対委員長は、金子みつさんで、終始つきっきりでマリ子さんを励ましてくれた）が開かれ、こちらには常時、亡くなられた都議のおつれあいの鈴木永美子さんらがつめていてくだった。

告示後から、候補者はそれまでの組合などの組織まわり中心から、遊説カーを使ってくまなく区内を回って住民の中へ飛び込んでゆくスケジュールへと移った。この遊説カーは、他の候補者と比べてスピーカーの装備などについても、いかにも質素で社会党らしくかった。

やっとこの日から、「都議の補選に立候補しました三井マリ子」とうったえることが合法的に認められるようになった。公選法というのは不親切で、とくに新人にとっては不利にはたらく法律だ。それまでは、ポスターを見ている人でも一体マリ子さんが何に立っているのか、わかりにくかった。区議だと誤解している人が多かった。

宣伝カーには、応援弁士としてたくさんの女の人にかけてもらった。連呼ではなく、ウグイス嬢とウグイス青年と

のかけあい、マリ子さんを紹介するというやり方もした。

〈女の会〉の企画では、日曜日にお花見野外コンサート（福山敦夫さんのタイの民衆の歌など）、夜には「女の元気をのせて・すぎなみコンサート」（友部正人、館野公一、ジョカ・アンド・イノさんら）をやった。杉並在住の歌い手の方たちを中心にした企画だった。

党との共催では、小学校の体育館をかりての個人演説会（四月六日）をやり、マリ子さん自身による手話を使つての演説、友人や教え子たちからのエピソードの披露などが好評だった。この時の参加者の百八十人余りは、労組が六割、友人、知人が二割、党の人とその他で二割といった構成だったろうか。ここでも、「普通の人」たちに来てもらうためのくふうがまだまだ必要だったと感じさせられた。

マリ子さんは告示日前後の一時期、疲労と緊張の蓄積、運動が計画どおりいかないことなどの重圧を肩に背負って、痛々しく感じられる時もあった。けれどもそんなことをふっきつての最後の一週間、マリ子さんはやれることのすべてを、最善をつくしてやりきろうという迫力に満ちていた。例えば、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪などの商店街を先頭をきつて一軒、一軒でいねいにまわり、一緒に参加していた人たちを感嘆させた。直接、見える形ではねかえってくる励ましを受けとめることができる、こういう動き方は疲れはしてもやりがいがあるようだった。またそのマリ子さんの行動力を見ることで、

まわりで応援している私たちも元気になってゆくという連鎖反応が、生まれてきたように思う。

男たちとの協力と分担

三月十五日の〈女の会〉事務所開きパーティーには、取材に來た読売新聞のカメラマンを入れても男の参加者は二人だけだった。しかし後半になると、手伝いたいと事務所に顔を出してくれる男たちも増えてきた。中には一週間、会社の仕事を放り出して事務所につめてくれるという男の人もあらわれた。

女たちの選挙で繰り返し問題提起されている、「選挙運動内でも生まれる女と男の分業」ということに関していえば、マリ子選挙ではそもそも初めから、分業体制というより分担することを確認し合っていた。社会党Ⅱ（男の人中心の運動体制）と、〈女の会〉Ⅱ（女の主張、女の行動力を中心である運動）とに。〈女の会〉がうけおったポスターはりや、催しの人手や費用などはすべてこちらでやるし、おおわくでのスケジュール調整から告示で一斉に掲示板にはり出す仕事、たてかんの作成や、遊説カーのスケジュールや運動、政策チラシの全戸配付、選挙管理委員会との対応など、短期的に人手をたくさん要することなどはクロウト集団の担当だった。

社会党へではなく、マリ子さんへの応援をしたい男の人たちは、やや遠慮がちに〈女の会〉ほうへ來た。男には期待さ

れていないような印象が強くて、どうかかわっていいのかとまどうと言う人もいた。

「女性解放」一本では自民党に対抗するだけの選挙は残念ながらできないこと認めなければならぬ。選挙とは、連帯と協力とができるなかに、可能な限り出合つてゆく作業ではないのか。その中で互いの主張を理解し合うように努めること、その大切さをわかったうえでなら、応援団は多ければ多いほどありがたい。

社会党との共同行動の打ち合わせなどでは投票日に近づくほど、支持層拡大のてだてをめぐって、激しい議論になることが多かった。例えば演説会の司会は絶対に女性にしてほしいとか、新聞広告を一紙から二紙にすることなど。そして互いに妥協して得た結果であっても、協力することの意味の大きさをいくつかの大切な場面で実感できた。

できるだけ広い間口をもって、来る人はこばまず、ふところも大きく、ということが選挙の理想なら、あとは内部でどれほど丹念な対話ができるか、しかないのかもしれない。実は、これが本当にむずかしい。

わが家庭内の分業についていえば、つれあいは家事、育児への責任を快よく引き受けてくれた。しかし、私は家にいる時まで選挙のことでうわのそら、話しかけても心ここにあらざだったという。ただ、ただ、選挙が終わるまでと辛抱していたら、当選！ その後もあいかわらずの私を前に、ついに

彼は家出を決意した。リックを背負った三歳の息子の手を引いて、とぼとぼ歩いているつれあいと、私は家の前の道で、ぼったり出会った。ここまで思いつめていた相手に気づかなかった自分のいたらなさを反省しつつも、私は二人の父子密着ぶりに感動した。しかし、これはチョットいきすぎだった。この時以来、私はつれあいの内助の功を、あだやおろそかに考えてはいけなさと胆に命じている。

最後の百二十分

投票日前の土曜日、私は朝から、この日の夕方のことを考えて、まわらなくなった頭を、ますますボーッとさせていた。私たちはこの日の六時から行なう阿佐ヶ谷駅前の演説会をこの選挙のクライマックスにしたいと、前から演出を練っていた。念願の土井たか子さんが都知事候補者の和田静夫さんらと来てくれることが決まった。《女の会》では、俵萌子さん、樋口恵子さんから応援演説の快諾をえていた。

駅前広場には、「女たちのマリ子、男たちもマリ子」の大きなパネルやピンクの旗、満開の花をつけた大きなカイドウの植木六本に、マリ子さんへの激励のたんざくを結んだ。三体の動物のぬいぐるみに人が入って広場でデモストレーションしてもらい、オカリナの演奏や大型照明機を用意した。支援者に振ってもらおうと用意した二百枚の赤いハンカチはあつという間になくなってしまった。

こんなにたくさんの方が阿佐ヶ谷駅前に集まったのは、十数年前に東京を革新にそめた、みのべ選挙の時以来だと、古い社会党員が言っていた。私には一体、何百人、何千人が、集まっているのか見当がつかない。とにかく、広場は期待をこめた人びとでぎっしりと埋まった。俵さんはずいぶん早くからいらして、「ちょっと後で見えます」と姿を消した。はりつめた、落ちついた、独特の熱きように満ちていた。田英夫、和田静夫、土井たか子、三井マリ子、の順で演説が行なわれた。司会は金子みつさんだった。

土井さんらが帰った後、宣伝カーの上には俵さん、樋口さんが立って、区議の笹田チエさんに司会は交替した。金子さん、マリ子さんも混じえて、先ほどの緊張した空気がとけ、和気あいあいとした雰囲気にかわった。たくさんの人たちはそのまま残って、第二部の女ばかりで意気上がる演説にかっさいを送ってくれた。

俵さんは都知事候補選びの話にふれ、帰ったばかりの土井さんと自分との結びつきをさらりと語って、その心情の深さが聞いている者の胸をうった。そのあと樋口さんは、マリ子さん応援の弁を確信にみちた語り口で述べられた。私はこれほど人を、すてきにはめて真心がこもっている話を聞いたことがないように思った。金子さんのしめくくりといい、女が女を優しく、強く、応援することのさわやかさが聞く人の心にしみじみとどいてくる演説会となった。

私はこの場の、この充実した時をつくりえたことで、充分選挙をやった意義があったと満足することができた。

吹く風も時には暖かい

選挙期間中には、思わぬところから風が吹いてくるものなのか。二年前に行なわれた都議選挙の杉並区における各党の得票数は、自民党プラス新自由クラブが八万、公明党三万、共産、社会、民社の順で二万、一万七千、一万五千だった。議員数は自民が三名（当時はそのうち一名が新自由クラブ）で公、共、社とが一名ずつの計六名。定員一名で当選するには、トップがありえず、支持票が四番目の社会党にとって、勝つことは絶望的にむずかしいというのが、客観的情勢だった。

岩手県でみられたような売上税の風、そしてマリ子の名前が浸透しはじめると、台風の目と形容されて最激戦区と報道されたためか、自民党では一度決まった公認候補者をむりやりおろして他の一人にしばった。そのやり方に腹をたてた保守系支持者から、〈女の会 事務所に熱心な協力の申し出があった。〉

また強固な支持層を持っている公明党は、今回候補者をたてなかった。そこで公明票の行くえが大きなカギとなった。私たちは公明党支持の女性グループや、知り合いのそのまた知り合いの創価学会員など交友関係を広げていって支持をお

願いた。今回の補選に自民が勝つと、都議会でも単独過半数の横暴が始まり、公明党のイニシアチブが後退してしまうかもしれない大切な選挙ですよとうったえることで、好意的な対応をしてもらえた。

私たちはとにかく、社会党支持の人たちは向こうに任せておけばいいわけなので、社会党嫌いな人たちへどのようにすれば共感を呼ぶことができるかを課題とした。まず何よりも女性たちからの支持、女の議員を増やそう、女の票を女へとうったえた。土井たか子さんへの幅広い層から得ている信頼が、そのままマリ子さんへの期待に、うまく結びつくようにと、土井さんからのメッセージテープはいろいろな所でくりかえし流した。

何が有利に働き、何が不利な条件になるかは、結果を見るまで、いや見たからといっても明確にはつかめない。途中で決してあきらめてはいけないのが選挙というものか、と思った。

ポスターがよかったとか、名前の字かくが一番少なかったせいだとか、と、勝った説明をする人もいる。マリ子さんが熱意をもってうったえ続けた、今の政治を女性の手で、よりよく変えてゆきたいという主張が、共感をもって受けとめられたことも大きいだろう。

それにしても〈女の会〉は、責任者や代表という者を特定せぬままで（しなかった面と、できなかった面とで）、個人

を頼るタヨリなさとタノモシさとを合わせもっていた。あやうくもしぶとくやってこれたのは、誰かがパンクすると、別の人 がやりくりしてカバーし、最短距離を次々とバトンタッチしながら全力疾走し得たからだ。一方的なお願いばかりして無理を強いたり、配慮がいきとどこかに失礼もすいぶんと重ねた。充分話し合うべきところを、即断、即決をせまられて、先送りにしつつ残してきてしまったこともある。

候補者というのは、バトンタッチの相手がいない独走者だ。自分の力だけではどうにもならない、大きな運動の先頭に立つて、決められたコースを間違わないように、ゴールまで、とにかく一人で、つっぱしることを強いられている。これは他の運動とは根本的に違う、選挙運動というものの宿命だろうか。お互いへのいたわりが、どうしても必要だ。

それぞれがみな、初めてのことをすいぶん大胆にやってこれたと思う。この経験をふまえたうえで、次にはもっとみんなにとって、愉しく、お金のかからない（女の会の活動は三百万円のカンパでとんとんの収支）選挙のための知恵を出し合っていていきたいと思います。もうあと二年後には都議選がある。今度は準備体操を充分やって、どこからか吹くだろう風にもめげず、（もっとゆっくり、中距離レース）を、息ぎれせぬよう、できるだけたくさんの人と走りたい。

はるかなるブンナリオへ

マリ子さんの当確は地方選の一番最後を飾った。それほどの大接戦だった。五万五、三三八票と五万二、五〇九票。三千票足らずの差だった。負けることと勝つこととは背中合わせだ。なのにその結果はなんという大きな違いだろうか。これを新聞は「奇蹟だ」と報じた。本当に「ありえないこと」を起こしたのだろうか。しかし「勝ってしまった」ということの重みはこれからしかわからないだろう。

選挙後の小さな集まりで、在目六年目のジェリーはこう言った。「杉並区に住む友人を訪ねる時、今までは道ですれ違ふ人たちに無関心だったけれど、今はひとりひとりの顔が全く違って見えるようになった。ああ、この人たちがマリ子さんを選んだ人たちかと思って、ほれぼれする」と。

マリ子選挙を応援する母親と一緒に、のぼり旗をかついで街中を歩きまわってくれた小学校六年の女の子にも大変革がおこった。新学年で決める学校の代表委員に、立候補してみごと当選、親や教師の目をみはらせたという。「内弁慶で、外では自己主張がにがてな子だったから、大変身よ。クラスの中で女子どうしが立候補しあおうと話合って、いろんな委員になったそうよ」。母親のKさんはマリ子選挙の「成果」を誇らしげに語ってくれた。

三井マリ子さんから三人の共著「女たちは地球人」（学陽書房、一九八六年）の一節に、女性共和国ブンナリオへの旅の

話が載っている。私はこのユーモアに富んだユートピア・ブンナリオ国の話が好きだ。この国は大統領以下閣僚の四分の三が女性で、国家予算の大部分が、教育・福祉・文化・環境保護、平和促進にあてられている。外務省はなく、外交は国際友好省が担当し、防衛庁もないから、防衛予算のない国だという。

五月九日午後一時、都議会の最前列に座ったマリ子さんは、今度の補欠選挙で当選した五人の議員のうち五番目に名前を呼ばれた。それぞれに三十秒ずつのあいさつの時間が用意されたのだった。軽快な足どりで演壇の前に立つと、彼女はにこやかにこういった。「日本社会党の三井マリ子です。東京を男女平等の街にしたいと思います」と。静まりかえったその一瞬、私は時がとまどってから、ゆっくり、しかし確実に動いたように感じられた。これはブンナリオ国をめざす女たちの高らかな、宣言ではなかったのか。

議場内を見わたすと、ここは愕然とさせられるほどの差別社会だ。百二十七名の議員の圧倒的多数が男で、そのうえ前方に居並ぶ都庁職員六十名中、女はたった一人だった。そして事務服を着た速記者だけは女のみ。この宣言は、受けとめ手のないまま、すみずみにまでひびきわたった。

今の政治のかたちが、男にむくようにつくられきってしまっているようにつくづく感じる。人手も金も、規模が大きくなればなるほど必要になる選挙。タテ社会の命令系統では容易に

短時間で片づくことでも、ヨコ並び人間関係を前提とする私たちの場合には、それぞれの歩調を整えるために足ぶみも必要なら、効率でわりきれない生活の都合を、切り捨てたり、他人へ一方的に押しつけたたりするのでない道を、お金がない人が出られるやり方を、試行錯誤しながら探すべきでない。

今回の選挙結果は、女の台頭、躍進と報じられた。しかし、この表現は間違っている。女たちは、ようやく、ほんの少しだけ地方議会に女を送ることができただけだ。ささやかでも貴重な、各地での経験を女たちで共有していきたいと思う。マリ子さんのこれからの活動を、孤軍奮闘で終わらせないために、ぜひあなたの目と心とで「政治」を注視し、声と力とを寄せてください。ブンナリオ国への一歩のために。いや、いまのこの国で保障されているはずの「平等」を、本当に実現するために。

三井マリ子と新しい政治を創る会

連絡先 杉並区阿佐谷南二の十九の十一

サニーハイツ一〇二号

TEL 03 (318) 5860

☆通信の交換を、まず経験交流の第一歩といたしましょう。

ご連絡下さい。

(富沢 由子)

1 経過報告

——この起こりは千夏の陣——

八六年の七夕選挙で、私たちの何人かは、中山千夏さんの選挙のお手伝いをした。結果は、本当に残念だったけれど、自転車でポスター張りに走り回った人たちの中には、ポツと灯がともった。中山さんを支持した人が、小平に八千三百四十人もいた！ということがわかったからだ。市民こそが政治の主人公、という彼女の発想は、私たちにとても近いものだったし、食べ物のお安全の問題、公民館の使いにくさ、子どもたちの学校の現状、在日外国人の人権問題等、身の丈の範囲での小さな運動（というのも気恥ずかしいくらいだけれど）をやる中でも政治の壁を思い知らされてきた私たちは、元気をいっぱいもらった思いがした。

女のネット7-7が
トップ当選に
つながった

小平市議
住田景子さん

自前の議員を！と立候補する人を捜したが、なかなか話とはまならない。結局年が明け、一月になって社会党から引退される現職の後を女性で捜しているが決まらない。推せんで、統一会派を組む人はいないかという相談を受け、この際、比較的身動きの容易な素敵な仲間の住田景子さんがやるしかない、ということになった。

手作りの、行って楽しくなる集会を！

早速支持する会を設立し（1/17）、ニュース発行、ポスター作り、主張をまとめたリーフレット作りをする一方、集いを計画した。

第一回は東民正利さんをお呼びして宮沢賢治の詩と童話の、十一弦ギターのひき語りの会、（2/25夜、二百人参加）。

第二回は「トークライブ——いま普段で政治を語る」と題し、池田あつ子さん（都議）、鶴田静さん（ベジタリアン料理研究家）長沼明さん（志木市議）と住田景子のリレー対談。（3/21午後、百名参加）。

教会をお借りし、手作りのピザやクッキー、おいしいいわめなどのバザーも同時に行ない、司会者の足元にははいはいの赤ちゃん、といった雰囲気の中で、手作りの、自前の、普段の政治のイメージが、参加したみんなの中に広がってくる、そんな集会が作り出してみんなはさらに元気になってきた。

——女の人は、素敵な仲間をいっぱい持っている！——

住田景子は、言ってみれば無名の女性。中山千夏さんのようなわけにはいかない。一人でも多くの人に、「こんなことを考えている。行動しようとしている人だ」ということを知らせなくてはならない。その方法は、「友だちの友だちはみーんな友だちになっちゃおう」ということしかないというわけで、紹介カードを広げ、「支持する会」の一人ひとりがミーティングを開き、友だちに引き合わせ、さらにその友人がまたミーティングをセットしてくれる、という具合。

カンパも人手も常時募集中と呼びかけた。

職場と家との往復（時にはおつきあいもあるのかな）の夫族に比べ、毎日を地域で過ごすことが中心の女たちのネットワークは、実にたいしたもの。共同購入のグループ、公民館でのサークル活動の仲間、PTA活動や学級保護者会等、子どもを通してのおつきあい。職場でも、仕事のことだけでなく、家事のやりくりのノウハウ、子育ての話等は仕事を続けるためにもしなくてはならないという具合で、今や女の人たちの政治感覚は、ぐーんと深化してきている。（惜しいことにはお金にだけは縁の薄いことが多い）。

初めのうちはなかなか広がりにくく、さてどうなるかと案じることもあったけれど、一月二十四日に、お茶の水のYWC Aで開かれた「女たちが創る新しい政治」の集いで、「私は『政治』がキライでした。それよりも、チーズケーキを作

ったり、子どもたちとたこあげをしたり、草木を賞でたりすることがうんと好きでした。でも、そんな私だから、やっぱりきちんと政治と向きあいたい」という発言をしたことがきっかけで、新聞やテレビの取材を受けたことも幸いし、「支持する会」の輪は、どんどん広がっていった。

ピラを作るのも、それを各人に手渡すのも、看板を作ることも、何から何まですべて自前の初体験というやり方も、多くの人々の共感を得ることができた。

——いよいよ本番——

地域の子どもたちといっしょに図工教室を開く美大生、女性問題に取り組んでいる女子大生、自立生活を送っている身障者と、その介護の学生、障害児を持つ母親、公民館等で様々な学習や啓もう活動を荷っている人々、宗教家、学校でがんばっている教師、食べ物や自然環境に関心を寄せる人々等、実にさまざまな人々が出会い、歩き始めた。すべてを取りしきる誰かが指示するのではなく、みんなの想い、時間、お金を寄せあつて、納得の行くやり方を作りだしていきたいと、壁新聞や、アンケート、ノートが活躍した。

・事務所は四〇人にもぼる人々の交替制で運営する。

・宣伝カーは、連呼するのではなく、大きすぎない音量で、主張をきちんと伝える。

・スポット演説をたくさん。前座の演説も普通の市民で。

・ たすきも白手袋も無し。カラフルなネーム入りTシャツを
駅頭あいさつや街頭行動でみんなが身に付ける。

・ 電話帳をめくっての電話戦術はとらない。

・ 車の乗員の人びとの食事準備も交代の持ち寄り。

等々、いわゆるプロの人から見たら笑われてしまいそうな、
私たちなりのやり方を通しきった。

演説を庭の水やりをしながらじっと聞いていてくれる人、
聞き終わって家からとび出してきて応援を約束してくれる人、
「こちらのほうへも話しに来て」と連絡を下さる人、カンパ
を手渡してくれる人等、想いが届いているという、手ごたえ
を感じとることの多い日々だった。

結果は小平で初めての三〇〇票突破トップ当選

・ 暮らしと政治のパイプ役を市政に。

・ 生活者の視点から政治を変えよう。

・ 子どもたちが生き生きと育つ教育行政の実現。

・ 戦争への道を許さない。

—— みんないっしょに生きたいね ——

これが私たちの掲げた主張であり、その具体化の一部がこ
れまで述べてきた活動でもあった。

選挙に関わりの深い人から「何票くらい読めたか」と聞か
れ、読むって何のこと？と聞いてみたり、〈支持する会〉二
百票が基礎票にすぎないと不安になったり、他候補者から

「絶対住田は大丈夫だからこちらへ」と言われる人が出てき
たり、と、期待と不安でドキドキハラハラの開票日、結果は
三千二百八十一票という初めての大量得票（従来の一位と一
千票近い差）となった。

2) 当選できなのはなぜ？

四か月前までは、ほとんど無名の住田景子が、なぜ当選で
きたのか。その理由は第一に、革新無所属の立場（組織や政
党の代表でなく生活者として）を明確にしたことである。第
二には、女たちが主人公の主張であり、選挙運動そのものも
女が荷った手作り選挙だったことである。第三には、もっと
女性を政策決定の場に、という世論が大きく幸いしたことが
挙げられる。マスコミの好意的な取り上げ方、社会党がぐっ
と後からのお手伝いに甘んじて下さったこともありがたかつ
た。

今日、女性さまざまな意味で力量をつけてきている。女
性の力を信じ、主体的な行動参加を信じあうことで今日の結
果があるのだ、と今さらのように考える。

3) 財政（含む〈支持する会〉活動）

・ 一九八七年一月から五月までのすべてのかかったお金は以
下のとおり。

・収入は（支持する会）への個人カンパ百四十万円、小平社会党総支部より、新人擁立積立から、統一会派を組むという条件で（※）五十七万七千円（ポスター、リーフ、葉書印刷代）社会党から、女性候補を大幅に育てるための特別施策の

〔支持する会〕	〔選挙活動〕	（概算）
リーフレット（1200部）	25万	人件費 7万
通信費	17万	家屋費 10万
事務用品（名簿ファイルetc）	10万	通信費 14万
コピー	4万	印刷費 41万
ニュース（1～5号）	3万	広告費（マイク看板）5万
車（宣伝カーガソリン代他）	6万	文具費 0.6万
看板（連絡所12本）	5万	食糧費 3.4万
集会会場費、宣伝他	10万	雑費 5万
写真記録他	5万	
雑費	3万	計 86万
計	88万	

計174万円

一貫として五十万円、集会や事務所でも常設したバザー等の売り上げの十一万円が主なものである。

※議会では、最低四人の会派でないと提案権がない。

（現在、小平市議会社会党は三議席のみ）

4）これからの課題

いざ市民の立場からを掲げて議会に入ってみると、おかしな点はいっぱいある。バッジのこと、お弁当のこと、視察のあり方、議会運営等。それらに対し、ひとつひとつきちんと判断し続けることは、大変なエネルギーが必要だ。ともに市政参加をと呼びかけた私たち市民一人ひとりが、住田景子とともにどれだけその立場を具体化していけるか、市民派政治の創造という大仕事が始まった。あくまでも楽しく、納得できる道を歩いていきたい。

（丹羽 雅代）



9942人

のみなさん
ありがとう

埼玉県議選

太田博子さん

「春の嵐」は終わりました。

三月十日の夜半に県議選への挑戦を「ヤルッキヤナイ」ときめ、十四日の夜にみなさんに相談し、「ヤロウ」と立ちあがってから一か月足らず。

私自身は、とりわけハードだった今年の三月定例議会に三月二十七日の朝五時までに全力投球し、続いて開かれたごみ処理場議会に出席して最後の発言。その間、選挙につきもののあらゆる煩瑣な雑用はすべて仲間のみなさんが猛烈ないきおいでこなしてくださったのです。

市議会が終わったその日から各地で座談会。選挙の期間も夜はひたすら座談会……。おかげで終わり頃には膝がはれてしまったほど。ごもその席でたくさんの方がたと初めてお目にかかりました。

そして選挙戦の五日め頃から、敗れても悔いのないように精一杯の努力を凝らし、体力の限界まで新座じゅうの路地へ車を乗り入れ、マイクで話をしました。ただ新座は何といってもなく、まわりきれなかったところもあり残りでした。が、日ましに耳を傾けてくださるかたや手を振ってくださいるかたがふえていったのは嬉しいことでした。

それぞれの地域で輪をひろげて下さったかた、車に乗って道案内してくださったかた、九日間、朝、昼、晩と美味しいごちそうを心をこめて作ってくださったかたたち、そして、花冷えの投票日に投票所へ出向いて投票してくださったみなさん、本当にありがとうございました。

県政と新座市民との心算で精力的なパイプ役をめざしながら、また、県西部の住民運動（とりわけラブホテル反対運動や消費者運動など）の県議会への窓口をめざしながら、実現しなかったことはかえすかえすも残念ですが、また四年後に期待しましょう。

統一地方選の後半には、埼玉県内の革新無所属の挑戦者たちがほとんどそれぞれの中、町の議会に出ることになりました。また、狭山で、所沢で仲間の女性が新しく議員になりました。

やはり時代は動いているのですね。

新座で頑張った若者たち、女性たち応援してくれた男性たち。この輪をひろげていきませんか？

燃焼しきれなかった人びと、あとちようと頑張らうと残念な思いの人たち、来年二月には燃えてくたすい。そして四年後の四月にも……。

私の最後の議会報告口を

私にとって最後のゴミ処理場議会。

三月二十七日徹夜議会のあと、二時間ほど仮眠して、八時四十分発。(それも同じ議会運営委員の市長の佐藤友助議員を叩き起こして私の車に乗せての出発)。志木地区衛生組合議会の三月定例議会の議案は、昭和六十二年度の予算と、職員の給与を引きあげる条例・修正予算(どの自治体も昨年十二月議会でき決したもの)が主。

昭和六十二年度のゴミ処理場運営予算は、松田常任副管理者がしっかりと目くばりして引き締めを心がけ、三市の負担を去年より三千万円減。でも総額十二億一千万円余り。新卒の負担は約五億円。市民一人あたり三九三〇円。

最後のチャンスとあって、長年主張してきたことを一般質問にまとめて通告しておいたのですが、いくつか前進がみられて嬉しい結果となりました。

菅理者山田三郎富士町市長の「管理者報告」とあわせて報告すると、

①富士見環境センターは操業開始一年を迎えるが順調に稼働中。

②焼却灰等の最終処分地確保は、住民の同意も考慮し、時間をかける。

③このままいくと五年後には第四焼却場の建設が必要となる。ゴミ減量は義務で、事業所ゴミの減量のためにもゴミ搬入量にもとづいて三市の負担金の比率を定めることとした(現在は均等割と人口割)。ゴミ量に従って負担金を定める従量割の導入を」と以前から私が主張してきた)。

④可燃ゴミの中に不燃ゴミが五%も入っている。缶が多く、次カビン。

⑤円高のためダンボールがふえている。過剰包装はやめてほしい。各町でもとりくんでほしい。

⑥ガラス類の収集は三市ともパッカー車を使っているが、収集の便利さより資源の再利用の方向を、将来は優先したい。

⑦最終処分場については、公共施設の下に灰を入れることを考えたい。(しかし、害を出さない処分場の工夫については、従来どおりの「ゴムシート張り」と、凝集沈澱法・活性汚泥法による地下水汚染防止策のみ。

東京都の日の出町の例をひいて、ゴムシートではダメだと主張しておきましたが、これ以上については私も勉

強不足です。

⑧新座団地後方の志木センター跡地は、ごみ焼却場用地からの用途変更が県の都市計画審議会でも承認されたので、処分方法は正・副管理者会議(三市の市長)で決める。

アトは美里さん ガンバツてネ

長年シケンカ相争いだった山田市長は、議長の間会宣言の前にわざわざ発言を求めて、私に送別のお言葉と贈り物を借しんでくださいました。なかなかの苦勞人です。

「こんどはもつとスゴイ議員を送りこむから大丈夫」と言っておきましたが、去る四月十七日の新座議会の役職アンドリ会議で、メダタク小島美里さんが志木地区衛生組合の議員の役を射とめました。ヨカッタ。

しかも、三市負担金を従量制にきりかえるための相談が始まった由。これで新座市もゴミ減量に本腰を入れるでしょう。

太田博子さんは新座市議を四期つとめた女新無所属のベテラン議員。向こうみずのみの会を中心人物。市議から県議へジャンプし惜しくも次点。名前の連呼でない

知ってますか？
女の政治団体
「みずの会」



新座タンジキチーム(NDT)が路上パフォーマンス

やっぱり
向こうみずだ！

指の折れるごと

握手

してくれ

455票

福岡県
稲築町

上田 マサノ さん

「ありがとうございます。はあ、今度は届きました。お祝いの電話を受ける新人町議の上田マサノさん（六十歳）の顔は、終始にこやかだ。

上田さんの住む福岡県嘉穂郡稲築町は、旧嘉穂地・筑豊のちやうど真中に位置する人口二万余りの小さな町。最高得票者が九百三票まで、上田さんは四百五十五票。大した票数ではないようだが、四年前に落選を味わっている上田さんにとって、この票の持つ意味は重い。

「小さな町やから親類や地区の締めつけが厳しかとです。地区長でもない自分は、町内全地区から票が集まらんと受かりません。稲築町の全地区（全町区）から立候補したようなもんです。そして、締めつけをはねのけるお母さんたちが、私を支えてくれたとです」。

選挙戦は、車の運転手を除いて全員が女性。四十代から六十歳ぐらゐまでの主婦ばかり。農作業の合い間を縫って選挙事務所に駆けつけてくれたおばさん。子母りを隣の人に頼んでやって来てくれた人。入れ替わり立ち替わりで、六十人の女たちが事務所に集まり、御飯炊きや米客の応待に当たってくれた。

上田さんの訴えは、福祉とお母寄りの問題。「保育所が一つしかないんです。若いお母さんは、働きたくとも働けないです。せひとも保育所は、ふやさんといけません」。「稲築には、昔よそから来て炭鉱で働き、閉山後子どもたちが東京、大阪へ行き、一人残されたお母寄りが多くですもん。平家で、壁も屋根もボロボロになった炭住（炭鉱従事者の長屋式住宅のこと）に、一人で暮らすお母寄りが死んで、私か後のけづけを世話したのが四人。一人はとうとう無縁仏になったままです。お母寄りを大切にせにやあ、いかにです」。

上田さんは「稲築町生活を守る会」を作って、以前からお母寄りや生活保護世帯の世話を続けてきた。社会から見過ごされがちな人たちとすると関わりを持ってきた上田さんには、年を追うごとに国や県、町の福祉予算の削減や締めつけは、じつとしていられないものだった。「これからは、こげな問題は、婦人でなくらんといかんんです。政党と関係はなけれど、やつぱり、せにやいかにとです」21

と上田さんは話す。

「街宣中に、ゲートボールのお耳寄り、ゲームをやめて
今度は、上うんな（上がってくれ）。子供は遠い所に行
ておらんたい。あんたが頼りばいいと言ったり。炭住を回
つたら、お母さんが十人ぐらい駆け寄りてくれて、牛の指
の折れること強く握手してくれたとですよ。もう、うれ
しくって」。

当選が決まり、用事があって町の福祉課に電話をかけ
たら「上田先生」と言われ、バカにされたように上田さん
には聞こえた。「今までお年寄りのことや何やかやで
福祉課に足を運んだのに、いつも応待は冷たいとです。
それが、あんた。議員になつたらコロッと変わり、何です
かね」

「今はただ、男性議員になめられんこと、引き締めて
いこうと思つとります。加勢してくれた人たちに答
えるためにも」。

稲葉町の女性議員誕生は、三十年ぶりのこと。派手
な選挙戦をくり広げたわけでもなく、ある意味で、上
田さんは淡々と戦い、そして当選した。今回の統一地方
選では、都議、県議、市議などで、女性候補の多くが
当選し、華々しくニュースで取り挙げられた。歴史
の流れは、今確実に女たちの手中にある。華々しくは
ないけれど、筑豊の小さな町でも、女たちは頑張ってい

ることをお伝えします。

“お待たせしております”

特集 丘々発行!

あごら特集 33号「新聞切り抜きに
みる女の16年」長いことお待たせして
いますが、あと今しで発行の見通しです。

事務局一同、今、毎日図書館通いをし
てがんばっています。

今しばらくお待ちください。

これから
はじまる

——我々は負けたの
かもしれない

島取県用瀬町
もちがせ

茅谷美鈴さん

みなさんほんとにありがとうという
手紙と一緒に茅谷美鈴さんのことが書か
れた新聞切り抜きがドッサリ事務局へ
送られてきました。臨月のおなかで、保守
風土に新風を、と頑張った前田亨子さんか
らです。ヤンネンではあるけど、負けて
スツキリしているのは、自分たちの選挙が
やれたから、と彼女も言ってます！

豊かな緑と自然に囲まれた鳥取で、あたり前に生きようと
することが息苦しくなつて数年。女が、人前で発言したり、
行動したりすることは、体制側にはひどく腹立しいことらし
い。

今から七・八年前、親たちが手を取り合つて、保育所のこ
と、地域のことを考え合おうよと《親の集い》を発足。これ
が、私の地域運動の始まりだった。子供たちによりよい環境
をと、よみかかせ会を基盤として、原発問題・合成洗剤・人
権問題・予防接種のこと・学校給食・食品添加物・図書館推
進・劇場運動等を、スライド学習・読書会を中心として活動
してきた我々に、画期的な事件がおこつたのは、三年前の
『文化革命』である。我が町の青年団が『わらび座公演』を
しようと数か月間取り組んできたのを、町サイドが圧力かけ
て潰してしまつたのだ。怒つたのは、元氣印の母ちゃんたち
ー。

たかが『わらび』で、潰す側に快感を与えてはいけなさと、
奮起。女たち数名で、『わらび座公演』を成功させてしまつ
た。

そして、『グループともに』翌年（あごら鳥取）を結成し
て活動を続けてきた。活動していく中で、ともすれば、体制
側のエネルギーに潰されそうになりながら、全国のいろんな
草の根運動の情報に支えられ、八六年夏の選挙結果に、今こ
こで普通の暮らし方をしたい側の声を町の決定機関に送り出

さなければいけないと痛感。

八六年九月二十二日、仲間たちと「みすず会」を結成。私たちのグループは、真に理解されないまま、いたずらに町行政サイドに中傷され、差別され、市民権さえも奪われそうなか、仲間一同、今ここでやらなければ潰されてしまうという必死の思いが、みすずを町議選へ「の思いに結集した。

一人ひとりの意見が尊重されるため、女も男も、子どもも障害者を持っている人も、被差別部落の人も、それぞれが生きて、人間らしく生きていける社会——そんな社会が、あたり前である事を伝えたい。選挙までの数か月、この思いを伝えようと仲間一同走り廻った。千七百の有権者のうち二百人の人と思いを共にすればいいわけだが、町長以下公明党一を除く全員が保守党の中、私たちは、やれ赤だの過激だのと潰す側のエネルギーもすぐてがなばりがいがあったというもの。

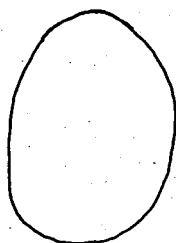
この選挙戦で何をしたかという点、一つには、仲間一人ひとりの「本来、選挙はこうあるべきだ」との考えを、これでもかこれでもかと出し合い、煮詰め合ったということ。「ピラを作って考えを出し合おう」「スポーツ演説をしよう」「なぜ今、仲間から出馬させなきゃいかんのかを学習しよう」——今の行政に何の不満もない人たちに、果たして今のままで本当にいいのかという疑問符を、投げかける術や方法論を戦わすことに終始した。

Aは、食べ物や合成洗剤の問題を、Bは、女が出る必要性を、Cは、これからをになう現役の親、若い世代が出る必要性を、Dは、教育問題を、Eは、本音論が大切なことを、Fは、自然保護を、と、それぞれが、各々の言葉で、オルグ、拡大に走った。

定期的に、地方自治学習会をしながら、金や権力を使わぬ選挙をと、バザーを開いて資金をつくり、飲食物持参で会合を開き、準備に取り組んできた。

手作りにしたくて悩みに悩んだポスターが出来上がった。

自転車や列を作って走ったりしようと言っていた案も、町内を廻りきれぬというので、しようがない、車にマイクと看板をつけた。事務所の看板は、皆で二日間かかって作った。手作りダルマにしようと言っていたが、「ダルマの片目に後で片目入れるのは、目に障害がある人への配慮が足りない」との意見に急転、ダルマはや



めて、平面たまご。かった時は、Vサインを入れようよってなとこで、たまごの出来上がりは、なんと当日の朝。

前日は、〈あごろ〉事務局からの応援旗が届いた。「たのしくさわやかにとうせんを」、〈あごろ鳥取〉も負けじと手作りの応援旗を作ってくれたので、それらの飾りつけ。日程

役割分担表も出来上がった。

この選挙を思いついてから今日まで、山ほどの仲間からの提案（コンサート&政治談議とかおそろいのトレーナーにGパンで走ろう、あるいはピラ作戦）は、選管からのクレームや地域性を考慮させられ、ことごとく断念。しかし、我々の共通のテーマの唄だけは、うたってスタートしたい。たとえば、それが遊びの様にとられようと、お祭さわぎと非難されようと、仲間たちと熱い思いを一つにしてスタートしたい。前日は夜半まで、どの唄にするか、ワイワイガヤガヤ三時間の歌声喫茶さながら——の後、結局、当初から候補に上がっていた笠木透の「私の子供たちへ」に決定。

さあ、いよいよ、出陣の時来た。七時五十分、役場へ七つ道具をもらいに、三名が出かける。八時四十五分、ポスターは「九番」を引いてきた。役割分担の手配をして——部落の約半分の家々の顔も見える。八時五十分、さあ、オープニング。「私の子供たちへ」の大合唱。「こんな世の中でいいのか」との思いがこみ上げ、早くも目をうるませてうたっている仲間達もある。仲間の一人が挨拶して、次に私が出発の挨拶。

初日から、二十か所くらい、スポット演説。主義主張のないと言われる我が町の議会選挙で、我々だけは、町民に対して失礼のない選挙をするのだと、とにかく、一生懸命、誠意をこめて、話をした。企業にも積極的に出かけ、町内の企業

余すことなく、演説をした。二日目からは、町内くまなく歩いた。手応えはあった。いろんな人から、電話が届いた。「始めは、お祭りさわぎかと思っていたが、あいつらは本気だぞ、きつとやるぞ」の声や、「演説に熱が入っててすごいぞ」——。

どこに行っても、泣いたり、じつと目をうるませ見守るように聞いて下さったり、あるいは、両手をにぎりしめて、聞いて下さる方々があった。「あんたの演説が聞きたくて待っていたのよ」と、自転車や車で追いかけてきて下さったお母ちゃん、おばあちゃん。本当に手応えがあった。絶対いけると思った。途中、「評判が良すぎて恐い、困った」と仲間から連絡が入る。「評判が良すぎて、票が上がりすべりしているから、お願いよ」とのコール作戦。しかし、ほとんどの人が、「絶対大丈夫よ、トップラインに乗った」との評判だよ」と、危機感が今いち伝わらない。

私も仲間たちも、評判がいいのは危険だと言いつつも、全員、心のどこかで、絶対いけると信じて疑わなかった。仲間たちは順番に、仕事を休み、身体をあけ、事務所に来てかわり、遠い町外の応援隊も、次々、かけつけ、マイクをもったり、ハガキを書いたり——。我々は、金と権力を使わず、普通のやり方で出たかった。最終日、他陣営の日の丸ハチマキ姿に特攻隊を連想し、背筋を寒いものが走る。また、夜、部落内を地区の若衆（青年隊）が列をなして巡回（他陣営か

ら票取りにくるのをみはるため」してゐるとの話に、軍靴の
気配を痛感。こんな選挙は、戦争への道——。こんな戦いで
なく、私は、普通に戦つた。普通にこそ、当選したかつ
た。どんなことをしても勝たなければ、話にならないとは、
我々は思えない。楽しく、さわやかに、普通に、選挙してこ
そ選挙である。選挙は戦争ではないのだから。

期間中へみすずを落選させる会ができてゐる等、夢にも
知らず、当日は仲間と共に開票所へ。

立合人Iの合図が遅い——。「あれ、忘れてるんじゃない
の?」「まさか?」Iの顔が苦しうなってきた。「うそ
——?」

結果はなんと十四票差で次点。

とても信じられない仲間たちの顔。私自身、放心状態。つ
れあいと手を取り合い沈黙——。

帰宅、涙涙の顔顔——。信じられないという電話や訪問
者。「文字どおり、明日にむかってがんばりましょう」の乾
杯の後、Vサインを入れるはずの「たまこ」に、皆で寄せ書
き。

そして、例の大合唱。

生きてゐる鳥たちに 生きて飛びまわる空を
あなたに残しておいてやれるだろうか母さんは
みあげてごらんない 山がみえるでしょう
目をとじてごらんない

こぶしの花がさくでしょう

結果として、我々は負けたのかも知れない。あたり前の事
が通らなければおかしいという我々は「理想選挙だ、甘い」
と批判された。しかし、我々は、まちがってはいなかったと
痛感している。それが伝わる人がこの地域には少なかっただ
けのこと。あるいは我々の運動の広がり、もう少し弱かつ
ただけのことだと思つてゐる。

一つの総括の前に、一人になりたくて上京。まっすぐに
〈あごろ〉へ行き、元気印の女たちと、我々のあたり前感覚
は、見果てぬ夢ではなかったことを確認したら一時間。

そして、心優しき山男たちと山へ——。戦いすんで、身心
共に疲れてゐるはずの私は、悲しいかな、「疲れたあ——」と
肩を落とし、心をとぎ放ち、甘える術を知らない。私はいつ
も、前向きに、元気に立ち向かう役をになつてゐるから、い
つも天使的存在でできたから——。そんな私の心を察しての配
慮。決して甘くはないコースを歩いて歩いて、登つて登つて
はいずり廻つて、途中、何度もうけそうになりながら、五
月の太陽と緑の中、ひたすら自分の体力と戦う。広大な自然
体の中で、自分自身に返る。

山に登り、自然体に返り、これでやっと一つの戦い、この
たびの選挙戦が終わつたと痛感。

明日からまた、一歩ずつ、したたかに闘いはじめよう!!
命を再生産させてくれた山々にありがとう!!

〈あごろ鳥取〉 芦谷 美鈴

「統一地方選挙」が終わった。鳥取市のことき昨秋の市議選、今冬の市長選と続いたから、かれこれ半年間、やっと、という感じだ。それにしても話題にはこと

欠かぬのが選挙……。売上税ショックを筆頭に、相乗り首長候補、マドンナ作戦、国府町議の大位選捕など結構ある。

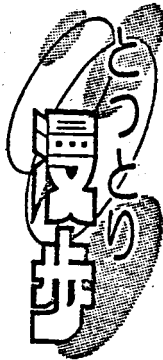
マドンナのひとり用頭町の戸谷候補は、他のふたりと異なつて、超党派に徹したが、14票差の次点に留めた。社会党本部は、土井委員長のお声がかりもあつて、同党としては破格の30万円の資金援助を申し出たらしい。

「ご厚意はありがたいけ

ど、手づくり、で間に合

たりする。一主婦の身で、地域の文化活動に積極的に参加してヒモをつけたくありません」

そう言つて彼女は断わつたとき、これを、議会運組と、他県出身の、よそ者



102

絶望するなマドンナ候補

菅のイロハをわきまえぬドの嫁であつた。この連中素人のたわごとと決めつには自民党の元県議の息子けるのは容易だ。だが、そのヨメもいる。彼らは一様のように嘲笑する。プロ議に町政の発展を願つて、草員こそが、例えば県議候補の根の民主主義の人柱にな補・山川派の事件に連坐しろうと誓ひ合つたそだ。

選挙戦に先立ち学習会を

開くことになった。一回目は寒い冬の夜八時から三時

間、講師には県議O・B会

幹事長のNを、鳥取市から

招いた。

「俺は、選挙、の、ノウハウ、を伝授しに来たのでは

ない。『地方自治の本旨』を

共に勉強したくて来たのだ。女性候補といえども手

ごろは加えずシゴクぞ。

選挙は、お祭り、じゃなく

て、修羅場、なんだい」

彼は、イギリスの地方制

度史から説き始めたとか。

この稿を執筆中、TVニ

ュースが伝えている。女性

の市長・東京都内の区長候

補五名は、いずれも落選し

た。かくも壁は厚く、そ

して重い。

だが、戸谷候補も、失望することはあつても、絶望しないでほしい。敗れた練馬区長候補のさわやかな弁に耳を傾けるがいい。

「これからも真直に、不

器用に生きてまいります」

マドンナと騒がれたり、

翔(と)んでいる女とマス

コミに登場するのが、議席

への近道ではあるまい。不

突で、器用な立ち回りだけ

に終始した中曽根総理の近

ごろの人氣はどうだ。その

うち僻地寒村にも、新しい

風が吹く。きつと吹く。吹

かせずにおくものか。

(滴)

(おわり)

選挙組織 なかで 女たちがやれたこと

福岡県議

藤田 一枝さん

一、共に出会おう女たち！

「……いろいろ考え、悩んだ末「大胆にも」（立候補を）決意しました（略）女が政治を変え、未来を切り開いていくために、私になにができるのか……「女の時代」を真に「女の時代」とするために、一つ一つ皆さんと共に創り上げていきたい（略）「母親」として「妻」として「一人の女性」として日々の生活を支え、その現実感覚を通して、社会を見つめ平和を願っている多くの女性の皆さんと出会い、語り合うことから始めたいと思います……」

年が明けて間もなく、福岡の女たちのもとへ一通の封書が舞い込んだ。差出人は藤田一枝。これが《明日の福岡をつくる女の会》の第一歩だった。

二、組織選挙の中で――

藤田一枝、三十七歳。一児の母。福岡市学校給食公社の調理員として、行革の波をもろに受けた現場（民営、センター）で労組結成。地域の母親、教師らと《学校給食を考える福岡市連絡会議》をつくり、給食の改善に取り組む。国連婦人の十年ナイロビ会議に自費参加。

初めに断わっておこう。今回の藤田選挙はあくまで組織選挙だった。彼女に白羽の矢を立てたのは社会党であり、労働組合という組織。女たちの運動の中から押し出した候補ではなかった。

しかし、これまで保革を問わず、終始「男の世界」だった選挙のあり方を問い直す声が、労働組合内の女たちの中から上がり始めていた。「選挙を女（わたし）たちの手に取り戻そう」。従来の枠を超えた女のネットワークを求める、冒頭の藤田さんの呼びかけにより一月十日に開かれた「共に出会おう女たち」の集いには、選挙には一歩距離を置いていた個人、市民運動グループの顔も見えた。

投票日まであと三か月。県下有数の激戦区とされる福岡市早良区。出遅れ、知名度不足、と厳しい戦いが予想される。選挙を知らない私たちに何ができるだろう？ しかし、「女の時代と、男たちから踊らされるだけでは何も変わらない」

「藤田さんの周りに、同じ思いを抱く女たちがたくさんいることを見せていかなければ」。

完全に独自の運動体を創り上げる時間と力量の持てない私たちは、組織にくい込む道を選んだ。どこの選対にも一応、存在する「婦人選対」をあらため、より柔軟で幅広い「明日の福岡をつくる女の会」として動き始めた。

三、明日の福岡をつくる女の会

限られた時間内に出遅れを回復するためには「女」で流れを変えることが必要。私たちは以下の行動に取り組んだ。

① 「女」バッジとテレホンカード

活動資金つくりとPRを兼ねてバッジとテレホンカードを製作、販売。イメージカラーのピンクと赤に「女」文字、「♀」印をあしらったデザインはなかなか好評だった。この売り上げとカンパ、製作費を除くと百万円そこそこの活動費となり、女の会独自のポスター、ビラ製作、通信費などをまかなった。

② 街頭情宣

一枝の名にちなんだ「一の日行動」（1日、11日、21日）、地域の婦人の集い、反売上税集会などなど。ピンクのトレーナーで町へ繰り出す。「くらしの声を県政へ」「女も男もいきいきと生きられる社会を」。藤田さんを囲んで一人ひとりふるえる手でマイクを握り、思いのたけをぶつけた。

③ 女の会便りの発行

福岡市は七区に分区され、選挙区はその一つだが、全市、全県下に女のうねりをあげるため、選挙区を超えて通信を発行した。もちろん区外の女から選挙区内の知人、友人へと伝わることを願って！。

④ 愛らんと早良フェスタ in 室見河畔

告示直前の三月二十九日、河畔公園でフェスティバルを開催。食べ物、花市、子供の広場。地域の運動のアピールコーナーでは、石けんに水の問題、反核、教育などとともに（あごら九州）も仲間入り。家族で楽しみながら燃えた。

このほか従来の選挙のパターンを破り、イメージを変えるため、基本選対の各企画に参加。リーフ、シンボルマーク、コピーに女たちの声が積極的に取り入れられたのは福岡では画期的なこと。事務所開きでは来賓のあいさつを思いきって省略、女たちの激励に変えた。励ます集いでは「ナウ・ウーマン」を上映、女を前面に出した。赤旗檄文とともに、女たちの思いをつなぐ色とりどりのメッセージハンカチが事務所を飾る。ささやかな試みかもしれないが「藤田の選挙はちょっと違うぞ」という声が聞こえ始めていた。

四、女たちが得たものは？

四月十二日、藤田一枝は一七、七三三票でトップ当選を果



たした。勝因と票の分析はひとまず置き、女の会の『収支決算』を見よう。

当初、様々な立場の女たち―労組婦人部と地域・市民運動グループetc―の出会いと交流、そして早良を拠点に福岡における女のネットワークづくりへ、とつなげていくことを

目ざした。しかし①早良の地元への足がかりがない②基本選対は従来どおり労組中心③女たちの交流も始まったばかり。しかも藤田さんは地域の運動からではなく社会党・労組からの出馬で、従来の選挙との違いは不鮮明。『普通の女たち』が飛び込むのは、抵抗が大きかったのも事実。

三か月の短い、しかも選挙といった否応なく動かねばならない取り組みの中、女の会の中でも充分な論議さえ持てず、女たちの動きが真に中心軸とはなり得なかった。しかしなお、女たちが出会い、動き、選挙を支え、あるいは多少なりとも選挙が、政治が自分たちに近づいてきた。そのことの意義は大きい。

五、女の会の再スタート

選挙は終わった。しかし、これからが本番だ。ごく少数の女性議員を議会へ送り出しただけでは、本当に私たちの暮らしの声を政治に生かすことはできない。出会った女たちが真に出会い、つながり、藤田さんとともに政治を切り拓いていくため、今、私たちは新たな女の会づくりに取り組んでいる。藤田さんからは早速、臨時議会の報告がなされ、「条例ってどうやって作られるの?」「議会ウォッチングをしよう」と、皆、身近になった県政に興味津々といったところだ。

女と選挙、女と政治―私たちにとっては未知の分野。どう創りあげていくか、どう転がるか、全くわからない。しかし、膨らみ始めた一つの確かな芽。大事に育てていきたいと思う。

補記 藤田選挙とともに私たちが闘った福岡県知事選、全国唯一の社共共闘で現職、奥田八二氏が一二六万三、一二三票、自公民推薦の田中健蔵氏に十三万票もの大差で勝利。革新知事再選を果たした。また、県議選では福岡市南区から出馬した社会党新人の榊京子さんが二二、五六八票でトップ当選。女性県議の議席が1/89から2/90になった。明るいニュースをとにも報告しておく。

(永田亜希子)

女の会とは
もえる女組との接点を
もとめている

福岡県議

さかき京子さん

さかきさんに寄せるひとつひとつの思いが、力が、行動が、ついに大きく花ひらきました。福岡県議選、福岡市南区からトップ当選。やったア!!

「あっ!!」というまの時間でしたが、十八人で発足した「さかき京子ともえる女の会」は三百人に成長しました。

ふりかえてみると、いろいろな思いが胸をよぎります。一生懸命、年賀状や住所録をくって南区居住者をさがし求めた日々。電話台の前で、見えない相手に頭を下げながらお願いした日々……。今はなつかしい思い出です。内実ゆたかな女の時代の幕を、でもやっと切って落とせた! あの選挙中の、狂ったような日々が、むだではなかった……。

「さかき京子ともえる女の会」は、これでいったん解散し、女の抱える問題を政策として提言していく等の活動を行なう組織〈会〉に装いを改め、再度出発しなおしたいと思っています。その折はどうぞよろしく願います。女たちの、楽しくエネルギーギッシユな出会いの日を楽しみにしています。新たな出会いの日まで、みなさんお元気で!

(活動経過報告)

「従来の、男性が前に出る運動ではなく、女性も前に出る、女性の発想を生かした運動スタイルが必要」との方針を貫きました。

(1) 主な活動内容

- ・全員(支持者) 加入呼びかけ(個人に、婦人団体に……)
- ・「もえる女の会」のニュース発行 2/5、2/13、2/23、3/2、3/9、3/12、3/17、3/25、4/3、4/25の十回。

・街頭ビラ配布……主な私鉄駅頭で午後五時―七時の間 二

月一隔週水曜日 三月一毎週水曜日プラスα

・ハンカチーフを使った寄せ書き

・3・8国際婦人デー街頭行動（自治労、地公労主催）等、集会に参加（事前に百八十人ほどの会員に電話で呼びかけ）

・お茶の間集会 2/25、4/8の二回

・リーフレット大作戦（関わった人、約二百人）、リーフレット作成→名簿大作戦（送り先の掘りおこし作業）→発送作業→でんわによる入会お誘い。

・さかき京子PR行動参加 4/5、4/8、4/11、候補者と一緒に街頭、商店街に繰り出してPR。

(2) 活動に要した費用

リーフレット代、ニュース発送費、会議費等で約五十万円。

〔総括〕

福岡県議選で、候補者の後援会や労働組合以外の市民運動団体や個人が選挙に関わり、労働組合等の組織と一緒にとりくみを展開したのは今回の選挙がはじめてのことでした。

はじめての試みであったため、さまざまな問題を残してはいませんが、女が政治に主体的に関わり、日頃の思いを政治にとどけ、今日の政治のありようにさまざまな問題提起を行うとともに具体的に行動を起こしていくことは大切なことと思っています。従って、残った課題については、粘りつよく向きあいながら克服していくとともに、今後も女の政治参加のあ

り方を追求していきたいと思っています。

(1) 今回の選挙戦の評価点

・女の思いを政治にとどけたいと願うおんなたちが十人の女性たちの呼びかけに手弁当で集まり、手づくりの運動をすすめたこと。

・女たちから女たちへ、女の立場から真剣に政治に主体的に関わりとうとする人たちのネットワークが広がったこと。

・ひとつひとつのとりくみについていえば、女性の思いを広くアピールする機会を得たこと。

・女性の選挙、という雰囲気づくりの役割を果たしたこと。

(2) 反省点

・資金面で主体性を欠いたこと。

・選挙事務所に直接出入りする顔ぶれが固定化したこと。

・発足が遅くなったため、活動内容をしほりこまざるをえず、カンパ活動も含め、人から人へ政治参加を語りかけていくような活動ができなかったこと。

(3) 課題

今後は、（さかき京子ともえる女の会）としては、いったん解散し、新たに広汎な女性に呼びかけ、女性の思いと政治をつなぐ運動体として再編を図っていかなければなりません。しかし、それに先立ち、今回の選挙戦の中で、（もえる女の会）と一緒に活動をすすめてきた労働組合との間に、組織運

勤と市民運動の違いから活動の総括にくい違いが生じ、互いに、新たな共闘関係の接点が詰めきれていません。

本来、独立した運動体である〈女の会〉としては、必ずしも労働組合との関係にこだわるものではありませんが、今後、さかき県議を女性の運動として支えていかなければならない時に、既存の労働組合と共に闘う場や方策を共有できにくくなることは残念です。

私たちとしては、このような状況を早急に克服するとともに今回の選挙戦に関わったときの思いを原点到、広汎な女たちに呼びかけ、女の抱える問題を政策として提言していく等の運動体に装いを改め、再出発する準備をすすめています。

（あごら九州 いしもとむねこ）



魔物のよう
な選挙でした

三鷹市議
菅原節子さん

四月二十七日、開票日、気になって事務所にかけつけて来た仲間たちは、菅原節子、二千十三票、十位、三期目当選の連絡が入ると、「やったね」「ワァーイ、楽しかったね」「もっとやりたいね」「よかったよかった」「ありがとう」と口に出す思いと喜びは同じ。

〈咲かせたい〉

菅原節子の選挙は、三鷹革新連合の仲間、保育園・学童保育所・地域で、集い、学び、語り合ってきた仲間たちが「節ちゃんに議員をもう一期やらせよう」とあーでもない、こーでもないという知恵を出し合う「相談会」で進めてきました。一人一人が、この選挙にかける思いを延べにして十時間余りも話し合って「咲かせたい」というコピーに表現しました。そして「咲かせたい」は、ポスター、リーフ、宣伝カー、事務

所のガラス戸等々あらゆるものに登場しました。

〈人と人との出会いの選挙〉

菅原節子が沢山の人と出会ったのはもちろんですが、同じ地域で近所に暮らしている者が新しく出会う、仲間や友達をつながりが生まれ多くひろがる、一人一人自分のための選挙でした。自分のやりたいことを声をかけて、あちこちで、お茶のみ井戸端会議、子どものこと、教育のこと、「秘密法」を語る小さな集まりがいっぱいもたれました。

人と人との間柄が身近になって、三鷹の街で暮らしていて、変だな、おかしいな、と思っているのは自分だけじゃないと心強く感じられて政治ってなんだか遠いと思ってたけど、どんどん近くなってくる。

〈告示からの一週間〉

告示日、自分の近所の掲示板（二百か所余）にポスターを貼る。「子どもと一緒に貼ったよ」、「仕事に行く前にながめて点検しているよ」「三か所じゃものたらないなあ」という声も。

事務所は連日、花や食べ物を持って立ち寄っては、山のようにあるいろいろな仕事をテキパキと片づけてくれる人たちに支えられてきました。宣伝カーは候補者を入れて五人。自分が乗れる時間帯の申告で、運転手もしゃべる人も、二十代から六十代と入れ替わり立ち替わり「一度乗ったら、おもしろくて、やみつきになりそう」「元氣が出るわね」と大にぎ

わい。

路地の隅々で、菅原節子は二百五十か所あまり、車を降りて、市民との交流の輪を広げてきました。菅原節子の訴えは「第一に売上税反対の声が中曽根を追いこんでいるが、軍事費のGNP一%の枠突破、国家秘密法で、戦争への道を行く中曽根政治を許さない声と運動が必要。国の意向を伺う市政ではなく、市民のための議会こそ現在必要であること」「第二は無所属革新であること。数が物言う政治ではなく、少数の意見を大切に尊重するのが政治である。人より違うということと排除される社会であってはならない。そんな小さな市民の願いや声をとどけるための力となる無所属革新でありたい」「第三に、女だからこそ政治がよく見えてくるという確信です。弱い立場の人達、くらしの中からの政治を大切にしていくなこと、議会の中にもっともつと女の人達の意見が大きくならなければ本当に市民のための政治は行えないと」。

選挙って楽しくて、おもしろくて、忙しくて、それでいて、落選するかもしれないという不安が常に脳裏を去らない魔物の様なものでした。多くの人たちに「ありがとう」。これからも面白いこといっぱいやれそうだね。

（湯川エイ子）

パート現場報告

埼玉 T・O

育児のため心を残しながら職場を去って、かれこれ十年あまり、やっと子育てから解放されて、仕事探しが始まりました。

募集広告を、片っぱしから検討し、日・祭日休み、子どもの帰る時間までに帰れること、清潔で、安全で、まあまあ収入があり、やりがいがあるって、楽しそうな仕事。こちらの要望は、数々あれど、そんな所はあるはずもなく、特別、才能も技術もなく、年齢も四十代にさしかかると、わがままも言っていられません。

かなり妥協して、時給六百円（まずまず）日曜は、月半休み（半分休めればこれもまずまず）、勤務は、三交替で、一日、四、五時間（夜は出ない）ということで、全国的にチェーン店をもつ、食品製造販売のお店に決めました。

仕事内容は主婦を長年やってきた私には、もってこいの、清潔で安全な仕事でしたし、パート五、六人、アルバイト三、四人で、朝九時から、夜八時までの営業で、最初は、本当によい職場に入れたものだと思います。

しかし、内情が少しづつわかってくると、いろいろ納得いかないことが多くなりました。

まず、お店の中に、社員なる人が一人もいないということ、何もかも全部パートまかせ、社員は一日一回、集金にくるといった程度です。そのため、パートに、いろいろな雑用、責任がかかり、誰かが休めば、誰かがその分をカバーしなければなりません。休みをとりたくても、パート同士気をつかいあい中で解決しなければならず、迷惑かけるのがいやで、とうとう月曜休みの約束も、どこかへいってしまいました。

それでも、黙々と、時には、二人分も三人分も働く先輩たちを、今、私は複雑な気持ちでながめています。パートのままだ、店長となり、売り上げにまで責任と負担を感じ、働きつづける先輩に尊敬の念は持ちつつもこれでよいのかしらと思ってしまうのです。

入ったばかりの私はまだ気軽な立場だからよいけれど、あれだけの責任と負担を感じるようになったら、何の保証もない、不安定なパートに見切りをつけようと思っています。

パートの場合、長く頑張れば頑張るほど、苦しくなる現場状況です。

8月予定の全国大会は

に変更になりました。

10月17日(土)~18日(日)

へあごら十五周年全国大会を

八月に予定していましたが、講師等

のご都合により十月十七、十八日に

変更になりました。すでに八月

の予定を組んで下さっていた方には

申しわけありませんでした。かせひ

みなさんおでかけください。

十七日午後の「講演と討論」の

部では

上野千鶴子さん

辻 和子さん

網野 善彦さん

というすはらしい顔ぶれ。

夜は歌あり踊りありの楽しいパ

ーティ。

十八日は参加者全員の一分回

スピーチなどによる交流会等を

予定しています。いろいろな

楽しいアイデア、ご協力のお申

し出をお待ちしています。

事務局員一同より

ひよっコリと鳥取の芦谷
美鈴さん、突然に沖縄の
島袋さんが事務局にみえ、
芦谷さんは用瀬町にさわ
やか旋風をまきおこした
町議選挙の様子を、島
袋由記さんは秋の天皇
の沖縄訪問を前に沖縄
ならばこそその平和運動の
話しを、私たちにだけ聞か
ずともったいないような
実践に裏うちされた深さ
をもって残(て)いてくれ
ました。

今月号の内容のとれを
読んで、女たちがそれ
ぞあの場で、何といきい
きと活躍しているかが伝
わってきます。

既成の政党の人たち、
特に社会党の男たちに読
ませたいと思います。

編集後記にかえて.. ③

6・21回カテナ基地包囲の行動に参加を



誓おう——沖縄戦の悲劇をくり返すまい
広げよう——草の根から反戦・反核・反基地を
変えよう——“核と基地の島”を平和の島に
創ろう——誇り高き文化・自然・いのちの絆
立ち上げよう——人間の輪でカテナ基地包囲へ

(島袋さんのおみやげのピアより)